

# 加賀藩前田利家・利常・綱紀公と古九谷の盛衰

## The Rise and Fall of KoKutani in the Era of Lords Toshiie, Toshitsune and Tsunanori of the Maeda Clan

山 本 博

公立小松大学

**Abstract:** Prior to the development of present day Kutani, the early Edo era witnessed a sudden outpouring of Japanese porcelain or KoKutani, but thereafter this craft disappeared. This article describes the history of the crafting of KoKutani during the period of the Maeda Clan under three Lords, Toshiie, Toshitsune and Tsunanori. Lord Toshiie, after taking up government in Nanao, Noto, established the basis for the subsequent prosperity of the Maeda Clan, exemplified by the tea ceremony in which porcelain plays an essential role. Lord Toshitsune, a governor who used well-thought-out stratagems, divided his territory into three regions for his sons. The Kaga Clan was provided to the eldest son. The eastern part of that area yielded gold and silver, which enabled the further development of Japanese art, culture and academic studies in and around Kanazawa. The Toyama and Daishoji Clans were given to his second and the youngest sons, respectively. The manufacture of KoKutani can be divided into two phases. In the first phase, solid materials were burned at a very high temperature purportedly in Arita, Kyushu, then shipped via the Japan Sea to Komatsu, where colorful Cross-like symbols were drawn onto the porcelain which was subsequently gifted by Toshitsune to Christian warriors. Mrs. Magosaki advances this hypothesis in the next article of this volume. Lord Tsunanori, the 5<sup>th</sup> daimyo of the Kaga Clan was a man of phenomenal intelligence. He requested his scholars to compile an encyclopedia that would surpass Honzou-Koumoku, the world's leading encyclopedia at that time published in China. The group of scholars led by Jakusui Inou successfully accomplished this challenge, resulting in the publication of Shobutsu-Ruisan. My sense or speculation is that Shobutsu-Ruisan might be regarded as the advent of science, and that Lord Tsunanori, on the other hand, may have had a negative view on the second phase of manufacturing KoKutani that was being produced under the neighboring Daishoji Clan. KoKutani eventually disappeared about 40 years after its inception and its revival did not occur until late in the Edo era. Similarly, the bright light of science triggered by Tsunanori was extinguished and not relit until Dutch science began to spread during and after the last days of the Tokugawa Shogunate.

**Keywords:** KoKutani, Arita, Komatsu, Daishoji, Shobutsu-Ruisan

## 一. はじめに

古九谷は、江戸時代前期、彗星のように現れ、やがて忽然と消えた。本稿では、加賀前田家、とくに利家、利常、綱紀三君との関わりから、古九谷がいつどのように発祥し、なぜ姿を消すに至ったのかを考察する。

本稿は、孫崎紀子先生による次論文<sup>1)</sup>の前座と位置づけただけであれば幸いである。孫崎論文は、長年にわたる知見の集積に立脚し、最近の発見も盛り込んだ、文理融合のお手本のような大作である。古九谷研究の金字塔の一つとして本紀要の紙価を高からしめよう。

## 二. 利家公の時代

加賀前田家は、徳川家と優に拮抗できる実力を有しながら、軍事を捨て、文化学術面で日本一を目指した。

加賀は、守護大名富樫政親が長享2年(1488年)に滅ぼされて以後、天正8年(1580年)尾山御坊が陥落するまでの一世紀近い間、本願寺門徒衆や国人衆によって支配される一向一揆の地であった。加賀藩の文化学術は、荒漠たる一揆の地に、あたかも無から有が生じたかの如く忽然と出現したかに見えるが、現代にまで延々とつづく加賀の文化学術は、けっして突如発生したものではなく、歴史が用意した環境や因縁を利家らがリスクを冒しつつ巧みに利活用し、それらを底流として生み出されるに至ったと見るのが妥当であろう。

前田利家は、金沢入城に先立つ天正9年(1581年)に能登七尾城主となった。能登は室町時代の応永15年(1408年)、幕府官領の一人畠山基国の次男満則(後に満家)を初代当主として以来、約170年間に亘り、能登畠山氏によって治められてきた。能登畠山家は、満家が足利將軍の御相伴衆を務めるなど、畠山家庶流筆頭として政治的に重きをなすとともに、小屋湊(現輪島)をはじめとする日本海側海上交通の要所を支配することで経済的にも繁栄した。能登畠山氏は天正7年(1579年)上杉謙信に滅ぼされたが、利家は能登を支配するにあたり、能登畠山氏の重臣であった長連龍や能登水軍を味方につけたり、能登の人々の精神的支柱の一つであった気多大社を保護したりすることで、畠山氏の遺産の継承に努め、自らの権力基盤の確立に役立てた。

能登畠山氏は室町文化の主要な担い手でもあった。とくに応仁の乱以降は、「畿内地方が戦乱に巻き込まれ、多くの優れた文化人たちが能州畠山氏を頼って下向し、京の文化を伝えた」と記載されている<sup>2)</sup>。能登畠山氏文化を代表、象徴する存在となった円山梅雪は、永正10年(1513年)畠山義元に請われ能登七尾に下向、茶道文化を七尾に広めた。梅雪は同年、夫人である京の豪商柳家の娘柳姫とともに、揚柳山本行寺を建立、寺内に茶室「きく亭」を設けた。茶聖千休生誕に先立つ十年前のことである。前田利家は七尾で「きく亭」を目の当たりにした頃から茶の湯に関心をもつようになったとされ、以後、天正11年(1583年)には津田宗及が大坂で催した茶会に織田有楽とともに参席、天正15年(1587年)には北野大茶会で豊臣秀吉の右座を務めるなど、歴史的にも有名な茶会の記録にその名を残す<sup>2)</sup>。

天正15年(1587年)前田利家は、キリシタン大名として日本国内外に名を馳せた畏友高山右近(図1)を客将として迎える。高山右近は利休七哲の一人に数えられるほどの茶人でもあった。秀吉から伴天連追放令が発せられたばかりの当時であって、加賀藩は、右近を受け入れただけでなく、利家の娘福姫や孫娘菊姫も洗礼をうけたように、キリスト教を受容した数少ない藩の一つである。利家は七尾西山台地に寺院を集めて、その中核に本行寺を配し、密かにキリスト教の信仰とヨーロッパとの交易の拠点ならしめたとされる。慶長4年(1599年)には、右近のための修道所が本行寺境内に建てられた。西山台地寺院群は現在も「山の寺」として残るが、立地、配置、門構え、建物の構造、退路などに軍事的配慮があり、武士団が常駐して警護したとされる。右近は本行寺修道所でキリシタン信仰を広めるとともに、ペレス神父ほかキリスト教宣教師を寄遇させ、天体、土木、自然科学、医学、薬学、火薬、銃器、軍船、航海などヨーロッパの科学、技術の導入を図った。慶長8年(1603年)には、別のキリシタン大名内藤如庵も右近のとり次ぎにより前田家に迎え入れられ、能登で知行を与えられている。如庵は、小西行長麾下の武将として文禄の役(1592-1593年)に出陣し、北京で秀吉軍の代表として明政府と交渉にあたったことが知られている<sup>3)</sup>。

加賀藩は斯くして、高山右近そして内藤如庵という当代きっての国際派武将を召し抱えるところとなったが、慶長18年(1613年)12月、徳川家康によって伴天連大禁教令が発令され、潜在的な国際展開力を表立っては活かしきれぬまま、翌慶長19年(1614年)1月、右近とその家族および如庵のマニラへの追放を忍容しなければならなかった。

利家公の治世期、古九谷は未だ興っていない。が、後の古九谷出現を可能ならしめた、いくつかの要素が潜在していた。その第一は、陶磁器が珍重される茶道文化の定着である。これは、利家公時代にはじまり、利常公時代の金森宗和流や裏千家招聘につながった。第二は、キリスト教の浸透と前田家武士団における信徒の増加である。イエズス会士ルイス・フロイスの『日本書翰』<sup>4)</sup>にも「御主でうすは各地に熱心なる奉教人を作りたまえり。彼等はこの組合の頭目として他の奉教人等の尊敬と愛とを受けたり。彼等のうちある者は才能ありて説教し、またどちりな・きりしたん<sup>注1)</sup>を教えたり。されば唯信徒を助けたるのみならず、またこの説教を聴き、その問答を習いて、新たに宗門に入るものも年々甚だ多し。そのうちの主なる首長は加賀国のジユストオ・右近殿なり」とある。第三は、宣教師による西洋の科学技術の伝来である。ローマ帝国時代の土木技術に端を発する鉱山技術により、越中や加賀の山々で豊富な金銀類が発掘され、これが、江戸



図1. キリシタン大名高山右近  
(志賀町; 写真提供、板垣英治氏)

中期頃まで加賀前田家の財政と学術文化の発展を支えつづけた。

### 三. 利常公の時代

利常公は、前田家の安泰と繁栄の礎を築いた深謀遠慮の為政者であった。まず、政治手腕の発揮で驚かされるのは、約 120 石の領地の子息たちへの分割である。図 2 に示すように、加賀藩 80 万石を家督とともに長男光高に、富山藩 10 万石を次男利次に、大聖寺藩 7 万石を三男利治に譲り、20 万石を自身の養老領として小松に隠居した。これにより、万が一改易された場合のリスクを予め軽減し、前田家の安定的な継承を担保した。利常公は、四代光高が早逝すると、未だ幼少だった五代綱紀の後見人となり、前田家三藩を小松から実質差配した。

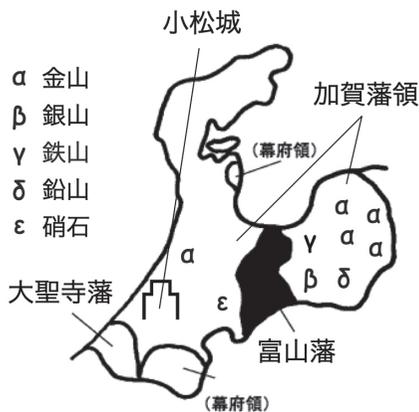


図 2. 加賀・富山・大聖寺三藩と加賀山

加賀藩は富山藩領の東側にも領地をもった。ここには越中七加<sup>かねやま</sup>称山と総称される鉱山群が存在した。金を産出する金山が 4、銀山、鉄山、鉛山各 1 である。富山藩は割を食ったように見えるが、利常は、牛ヶ首用水を建設し、それまで絶えなかった神通川の氾濫・洪水を防いで次男の藩を安堵させた。牛ヶ首用水が灌漑する農地は富山藩最大の穀高を産するに至り、用水は「四万石用水」ともよばれた。加賀山での採掘や用水工事に西洋伝来の鉱山・土木技術が活用されたことは想像に難くない。

利常公は、茶道の導入にも積極的であった。寛永 2 年（1625 年）には金森七之助を召し抱え、慶安 5 年（1652 年）には小松城に千仙叟を迎え入れた。前者は宗和流、後者は裏千家としていまにつづく。

古九谷は、現代九谷と同様、磁器に分類される。松本佐太郎氏は、伊万里、鍋島などとともに、九谷を「明窯系（磁器）」に区分し、「古九谷は明朝亡命の陶工に依って起これりと信じてみます」と記載している<sup>5)</sup>。すなわち、まず素焼され、ついで釉薬をかけ、千数百度の高温で本焼したのち、絵付けして、最後に本焼ほど高くはない温度で焼かれる。筆者は、古九谷は有田で本焼された素地が海路小松に運ばれ、蓮代寺で絵付け、完成されたという孫崎紀子氏の説を支持したい。

筆者が孫崎説に出会ったきっかけは、令和元年（2019 年）小松市で開催された講演&パネルディスカッション「利常と古九谷」であった。このとき、孫崎氏は企画名と同じタイトルで基調講演され、筆者は「利家公、利常公のイノベーションと三州経営」とのタイトルで講演した。他にパネリストとして、前田家 18 代当主・前田利祐氏、石川県立九谷美術館長・武腰潤氏、小松九谷工業協同組合理事長・吉田幸央氏が登壇された。孫崎氏は、同年上梓された自著『古九谷の暗号』<sup>6)</sup>の内容を中心に発表された。すなわち、利常公が小松に隠居しているときに、大坂夏の陣で戦功を挙げたキリシタン藩士たちへの恩賞として下賜するために古九谷大皿（洗礼盤）を焼かせた、

との結論である。明国の滅亡後、九州肥前有田に亡命してきた明の陶工たちによって焼かれた皿を日本海→安宅→前川→木場湯と運び、蓮代寺の「飛び地」で絵付けし、「瓦焼」の名目の下に焼かせた、それが、古九谷のはじまりであった、という説である。筆者は、窯業を家業とする家に生まれ、焼きものの制作や鑑賞に親しんできた関係もあり、ありうる話と合点した。

第二期古九谷は、朝鮮釜山で窯のつくり方を学んだ、後藤才次郎を創始者として大聖寺藩九谷村で焼かれた。筆者が高校生の頃、楽焼と茶杓づくりの手ほどきをうけた宮崎央先生は、古九谷が承応明暦の頃（1655年前後）に創始され、約40年間継続した、と記されている<sup>7)</sup>。第二期古九谷閉窯の原因には、諸説ある。後藤家は元来金銀を細工する吹座役であったから、才次郎が磁器の原料となる磁石だけでなく金銀も探したかみしれず、大聖寺藩は金銀探索が幕府の目に留まることを恐れたため閉窯した、あるいは、藩の財政不振のため廃窯した、などである。筆者は、次項で述べるような、別の要因も加わったのではないかと考える。

#### 四. 綱紀公の時代

加賀前田家五代綱紀公は、類稀な目利きであった。

中国明時代に編まれた李時珍『本草綱目』（1578年、全52巻1892種）は、当時世界一の博物事典であった。が、それを「頗る<sup>すこぶ</sup>慊<sup>あきた</sup>らず」とし、「稻宣義（通称若水の本名）の食物傳信纂を閲するに及びて、大にその博識に感ずる所あり。遂に宣義をして庶物類纂を編せしめて、以て本草綱目の遺漏を補ひ、一は世を益すると共に一は彼の素志を大成せしめんと欲し、命じて京師に還りてその資料を蒐集せしめき」と伝えられている<sup>8)</sup>。

綱紀公のこのような眼力は、もしかしたら古九谷の運命に負の影響を与えたのではないかと、というのが筆者の推測である。

孫崎説に従えば、第一期古九谷には、贖罪をかねた報奨としての役割やキリシタンのシンボルマークを備えた洗礼盤としての意匠が求められた。第二期古九谷は、これとは異なり、所蔵や進物を目的に大聖寺前田家の特産として焼かれ、すると、鑑賞に耐えうる美しさが第一義的に求められたにちがいない。第二期古九谷が親藩である大聖寺藩で生産されたとはいえ、本藩である加賀前田家当主、綱紀公のめがねに適うようなものでなければ、直接間接に悲惨な運命を辿らざるをえなかったのではないだろうか？加賀前田家家老、前田貞親の覚書に出会ったことが、この推測に至るきっかけとなった。曰く、「御室焼の香合十三が出来、京都から到着した。御新蔵品として上納したが甚だ不出来で御用に立たず、なんとかして焼き直させよと仰せられたことにつき、千宗室方からは仁清は二代になり下手である旨申して来たので、どこなりと上手に焼く者を問い合わせるその者に焼くことを命ずべき旨を上申したところ、とにかく御用に立たないので返品せよと仰せられたことにつき、右のとおり宗室方へも申し伝え、返品すべき旨を表納戸奉行へ申し渡した。委細は右奉行のもとに提出し、手元にこの留め書きを持つ」（図3）<sup>9)</sup>。「仰せられた」の主語はもちろん綱紀公である。初代仁清は国宝色絵雉香炉などの名作を残したことで知られるが、

二代はそうではなかったらしい。これに関連して、宮崎論文では「当時は年々藩内で製作した刀剣・蒔絵などを他に進物としたのに、陶器だけ京都や伊万里に注文した」と記されている<sup>7)</sup>。この「当時」が古九谷閉窯後を指すにせよ、それ以前を指すにせよ、たとえば狩野派の絵画に親しむなど、文武全般に造詣の深かった綱紀公を古九谷は満足させえなかったのかもしれない。

ところで、『庶物類纂』は「巻首上」に「序」と「叙」を載せている<sup>10)</sup>。「序」は寶永7年(1710年)、本邦朱子学者室鳩巢より、「叙」は正徳2年(1712年)、朝鮮からの信使李東郭より寄せられた。当時の加賀は、新井白石をして「天下の書府」と言わしめ、数多の学者の集まる処となっていた。就中、「翹楚となし、特に門下に秀穎を出せるは之を大書するの價値あり」とされたのが、木下順庵、室鳩巢の二人で、「秀穎」の一人が稲宣義、通称若水であった<sup>8)</sup>。室鳩巢「序」で「總て一千卷」、李東郭「叙」でも「千卷之夥」とある。が、これらが寄せられたのは、尚未定稿の段階であった。「宣義は漢名の知られたるものを以てこの千卷となし、その終われる後更に和名のみを以て行はるゝものを録し、續編千卷たらしめんとの企圖を有したりしが、正徳5年(1715年)京都に歿し」た<sup>8)</sup>。

このときまでに編まれていたのは、362巻1180余種であった。完成を見ることなく、綱紀公も享保9年(1724年)、鳩巢も享保19年(1734年)に死去する。若水、綱紀公、鳩巢の遺志を継ぎ、新たに638巻を加え、正編1000巻全2214種を完成させたのは、稲若水の子孝輿、通称新助と若水門下の上足内山覺仲であった。ときに、元文3年(1738年)。斯くして、草・木・土・石・金・穀・蛇・蟲・花・果・海菜・水菜・菌・羽・毛・鱗・介属等全26類の物類を網羅した『庶物類纂』全1000巻は成った。孝輿も、將軍家への献上の直前、「元文2年(1737年)の暮もしくは元文3年(1738年)の春浅き頃」<sup>11)</sup>、江戸で歿する。綱紀公によって編纂が命じられたのは元禄7年(1694年)であるから、『庶物類纂』編纂は、半世紀近くに亘る、志気高く、世代を超え、生命を賭しての真に遠大な企てであった。

なお、「序」中、「この編や子の意に於いて何如」と弟子若水に感想を問われた師鳩巢が「天下の物類に精しき者、聖人にしくはなし」と応えた様子が記されている。しかし、こと薬に関しては、聖人—孔子は慎重あるいは謙遜であったようだ：「康子、薬を饋る、拝してこれを受く、曰く、丘未だ達せず(わたくしはこの薬のことをよく知りませんから)、敢えて嘗めず」<sup>12)</sup>。他方、本草学を中心に、物類の本態を追究し尽くさんとする若水一門の姿勢は、系統的、網羅的で透徹

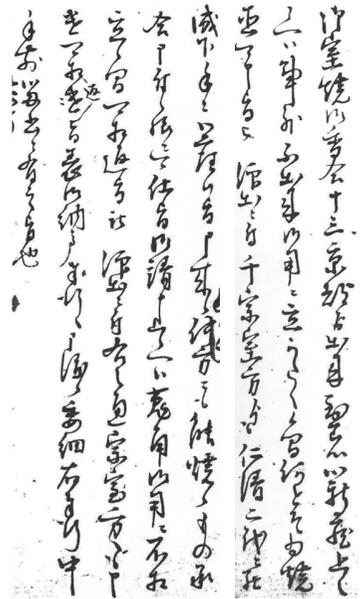


図3. 元禄8年9月26日の前田貞親書書  
(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

しており、礼の思想家孔子や朱子学者鳩巢の思惑を超えた、科学の先駆というべきものであった<sup>13)</sup>。

しかし、綱紀公の時代に勃興したかと思われた科学が三州に根付くには、幕末期以降の蘭学普及を待たねばならなかった。九谷の盛衰は、これに似ている。古九谷閉窯後、黙したかの如くであった九谷焼は、江戸時代後期、再興古九谷の登場を待たねばならなかった。

## 謝辞

『前田貞親覚書』をご解説いただきました本学西村聡教授に感謝申し上げます。

The author is grateful to Dr. David Klein for his critical reading of the abstract, and to Vice President Yoshimasa Yokogawa for his valuable advice.

## 注

注1) 活版印刷されたキリシタンのための教理問答集。

## 参考文献

- 1) 孫崎紀子『国際文化』6:9-27「加賀の古九谷誕生の道」(2024年) 公立小松大学国際文化交流学部発行
- 2) 嶋崎丞『加賀前田家百万石の茶の湯—利家から現代まで』(淡交社、2002年)
- 3) 池上裕子、池享、小和田哲男、黒川直則、小林清治、三木靖、峰岸純夫 編集『クロニク 戦国全史』(講談社、1995年)
- 4) ルイス・フロイス著・木下空太郎訳『ルイス・フロイス日本書翰』(慧文社、2015年)
- 5) 松本佐太郎『陶磁器の分類に就て』(1930年) 小松市立図書館蔵
- 6) 孫崎紀子『古九谷の暗号—加賀藩主・前田利常がつくった洗礼盤』(現代書館、2019年)
- 7) 宮崎央『高校教育研究』11:77-90「九谷焼の歴史」(1960年)
- 8) 『石川縣史』第参編第三章「學事宗教」(1940年) 石川縣発行
- 9) 『前田貞親覚書』(加越能文庫) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
- 10) 『庶物類纂』「卷首上」金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
- 11) 加藤豊明『北陸医史』4:36-38「内山覚順(覚仲)と稻生宣義(若水)」(1982年)
- 12) 孔子『論語』「郷黨第十」金谷治訳注(岩波文庫、改訳第1刷、1999年)
- 13) 山本博、西村聡『北陸医史』43:36-42「稻若水『庶物類纂』への室鳩巢「序」とその位置づけについて」(2021年)